

外国人住民の評価の語らいから見る
インターアクション問題
——英語公用語の環境から現実の日本社会に出るとき——

竹内明弘

Interaction Problems of Foreign Residents
as Reflected from their Evaluation Narratives:
When Joining the Japanese Society in
Reality outside their English Speaking
Environment

Akihiro TAKEUCHI

In order to promote globalization, more and more multinational corporations and tertiary educational institutions in Japan adopt the policy of using English as an official language for internal communication. From the viewpoint of speech community (Gumperz, 1964), it can be assumed that norms of communication within such organizations based on English can be very different from those in the host society based on Japanese. By using the language management theory (Jernudd & Neustupný, 1987), a survey was conducted in order to find out how a group of international students attempted to solve problems they encountered when interacting with local Japanese outside their English speaking environment. Through an analysis of their evaluation narratives at the micro-level, this study aims to provide evidence for the development of Japanese language courses for migrants and language policies in the Japanese society.

キーワード：英語公用語、言語共同体、グローバル化、接触場面、評価

1. はじめに

日本国内において、英語を公用語とする組織・機関が増えてきた。企

業¹⁾では楽天が2010年から「グローバル化のための先行投資」²⁾を目的として社内英語公用語化を進めてきており、その他日産、ファーストリテイリングなども同様の方針を採用している。また高等教育機関を見ると、2009年時点で英語のみで卒業できる大学が57、研究科が101³⁾(文部科学省、2009b)あるが、グローバル30(文部科学省、2009a)スーパーグローバル大学創成支援事業(日本学術振興協会、2010)が示唆するように、グローバル化推進目的で外国人教員数と留学生数の増加、外国語だけで卒業できるコースを設置⁴⁾する動きが加速傾向にある。

これらの組織・機関は、マジョリティ・ホスト言語として日本語が通用している環境にあって、人為的に英語を公用語とする規範が敷かれた場であること、その規範の影響が及ぶ範囲内でいわゆる言語共同体(次章で後述)⁵⁾が形成されていること、その成員には日本人と移住者が混在していることなどが共通している。

このような言語共同体の問題は、成員が内と外でインターアクションの際に結局日英2か国語を使用しなければならないことにある。また成員内の移住者にとっては共同体の内外共に接触場面になる。このような2言語併用や接触場面の問題に対しては組織・機関から個人に至るまで様々なレベルで策が講じられているが、ネウストプニー(1995:69)の言うように「すべての問題は解決でき」ていない。それは外は未だ「グローバル化」されていない世界だからである。つまりグローバル化対策が共同体の内外に常に言語・文化的なギャップを作りだし、それが新たな問題の原因となっているのである。

このような言語・文化的ギャップに起因する問題に着目し、筆者は英語公用語環境の教育機関に在籍して日本語を学習している留学生が外部で遭遇する接触場面の問題を分析し、その知見を日本語のコースに活かそうとしてきた。本稿もその一環として、日本国内の完全に英語を公用語とする高等教育機関に在籍し、言語共同体を形成する移住者が外部で遭遇した日本語接触場面の言語管理プロセスを分析し、考察を試みようとするものである。

2. 研究対象の言語共同体

2.1. 概要

本研究で扱う調査対象者は、多言語話者がある集団に属し、その集団の共通語が一つに定められているという状況にある。このような集団を語るに相応しいことばとして言語共同体を使いたい。言語共同体とは Gumperz⁶⁾ (1964) によると「人々が同一の言語体系を使って常に頻繁な相互作用が行われている一つの集団、および集団間で言語体系が大きく異なる複数集団で構成される集団」と、また Jack, Platt & Platt (1992) によると「村や地域など共同体を形成する人々の集団で、少なくとも一種類の共通言語を持っているもの」と定義されている(筆者訳)。

本稿では言語共同体を「少なくとも一種類の言語を共有する人的集団」と定義する。

本研究で取り上げるのは、ある日本の高等教育機関(以降 I 大学)で、ほぼ完全な英語公用語環境⁷⁾である。地方の田園地帯にキャンパスと学寮があり、全学生の9割弱⁸⁾がキャンパス内の学寮に在住している。また全学生中外国人留学生は9割弱⁹⁾を占めている。調査時点での学生の在籍期間は最長2年である。

国連(United Nations, 1998)は、ある国に最低3カ月以上滞在している外国人は移住者と定義しているので、本研究で扱う留学生は短期か長期の移住者¹⁰⁾と言える。

2.2. 言語共同体の成員の言語管理の特徴

I 大学で日本語プログラムの提供するコースを履修している学習者は学内では少なくとも英語と日本語(母語が英語でない話者は3言語)の多言語話者で、1. 全学レベル、2. 授業のレベル、3. 個人レベルの三つの規範に基づいて言語管理を行っている。まず全学的レベルで英語公用語の規範が敷かれており、この規範は学内の諸事全般に適応され、個人もその規範を最優先することになる。この場合は殆どが英語接触場面となる。

次に全学レベルに包摂される授業レベルの規範として「日本語の授業で

のインタラクティブな行動は可能な限り日本語で行う」という規範が敷かれていて、学生はこの規範の適用を受ける。ここでは日本語接触場面が主であるが、場合によってコードスイッチングが起きて英語接触場面になったり、英日以外の言語の母語話者場面になったりする場合もある。最後に学習者は学内外で個人レベルの規範を前述の2種に加えた中から、状況に応じて選択し、複数言語を管理している。

3. 言語管理が行われる場についての先行研究

コミュニケーションが行われる「場」の考え方については Hymes (1972) の SPEAKING モデルが詳しい。コミュニケーションの最初の要素として挙げられているのは Setting (場) & Scene (状況) である。Hymes (1974) は場と状況を以下のように定義¹¹⁾している。

場: 言語行為の行われる、一般的に物理的な時間と空間を合わせた状況を示す。

状況: 「心理的な場」、「文化が定義する」場のこと (筆者訳)。

本研究では特に「場」(Setting) に注目する。

加藤ら (2002) による国内の大学に在籍する留学生の遭遇する問題の調査は、問題が発生する場が、来日当初はほぼ学内に限られ、時間経過とともに学外へと広がっていくことを明らかにした。

澤 (2011)、澤ら (2008) は電話でカタログを請求するという接触場面の課題を与えられた学習者の言語管理を分析した。そして談話の流れの中で自己紹介、挨拶、依頼などの機能の理解とどこで発話するかという談話の構造に関する問題が多いことに着目し、その対策を日本語コースへフィードバックして活用している。

竹内 (2011) は英語公用語環境の大学に在籍する日本語初級程度の学習者が遭遇する問題を調査し、学外の日本語使用の接触場面で問題が留意されるケースが学内に比べて圧倒的に多く、その中でも公共の交通機関の利用や道順を尋ねる実質行動に関するものが極めて多いことを報告している。

4. 研究のスコープ

本研究では I 大学の日本語中級コースの学習者の遭遇したインターアクションの問題とそのマイクロレベルでの言語管理プロセスを分析することにより、英語公用語環境の言語共同体並びに、日本語コースへの示唆を考察するものである。

現在までに、筆者は様々な初級レベルの日本語学習者が遭遇した問題の管理プロセスを分析し、次世代留学生の事前管理に役立てようとしてきたが、本研究はその意義もある。

5. 調査方法

本研究では、2013 年 9 月から 2014 年 6 月まで、I 大学の日本語中級コースを履修していた留学生延べ 89 人を対象に、以下の手順で言語管理プロセスにおける評価に関するデータの抽出を試みた。

1. 意識づけ：冬休みや春休みからクラスに戻った時に休み中に自分が遭遇した問題とそれをどのように解決したかを思い起こしてもらう。
2. 問題事例の収集：宿題提出、発表、発表後の教師による聞き取り。
3. インターアクション・インタビュー（ネウストプニー、1994）：事実と本人の意識を確認する目的で個別に実施。
4. データ収集：インタビューの内容は録音され、原稿を起こし、その後分析した。

6. 調査者のプロフィール

前項の方法でインタビューを行った留学生の中から、評価に関する語らいが比較的明確だった 5 名を選んだ。プロフィールを表 1 に記す。この内 IF と KM はそれぞれ今回インタビューをしなかった友人（CY と MH）とペアになっており、以下に情報を記す。CY：中国人女性で日本語は OPI 超級レベル、MH：メキシコ人男性で日本語上級コースに在籍。

表1 調査者のプロフィール

単独 / ペア	参加者コード	出身国	性別	問題遭遇は来日後何か月目か	日本語レベル
単独	TF	タイ	女	4	中級クラス
単独	PU	パキスタン	男	17	中級クラス
単独	JJ	ヨルダン	男	19	中級クラス
ペア X	IF	インドネシア	女	19	中級クラス
ペア Y	KM	カザフスタン	女	5	中級クラス

7. 分析

7.1. 分析の枠組み

分析には Jernudd & Neustupný (1987) の言語管理理論を使用した。5 件の事例を分類する視点を以下に示す。

1. 問題の管理が行われたのは単独か共同か。
2. 管理プロセスの流れが円滑だったか、停滞したか。後者はどこで停滞したか。
3. 2. のどちらの場合もその原因は何か。

分析の構成は以下のようにした。まず〈語らいの記述〉として宿題や発表で語られた趣旨とインタビューで語られたことをまとめて記し、後の分析で参照する個所に下線を施した。下線部の典拠となったインタビューでの実際の発話を〈インタビューでの実際の発話〉の後に、分析を〈分析〉の後に記す。〈語らいの記述〉と〈分析〉の中の典拠について、〈インタビューでの実際の発話〉を参照するものは『発話+参加者コード+引用番号』(例: 発話 TF-1) で、〈語らいの記述〉中で参照する下線部を『下+番号』(例: 下 1) で示す。

7.2. 単独で言語管理を行った事例

ここでは TF、PU、JJ の各学習者が単独で言語管理を行った事例を扱

う。1件目は問題に対して迅速に調整行動がなされた事例で、2、3件目は言語管理プロセスが滞って、調整行動が遅れた事例である。

7.2.1. TFの事例：単独管理・円滑な管理プロセス

TFは日本で新年の花火を見るという実質行動を達成するためにいくつかのストラテジーを事前に準備しており、日本人とのインターアクションを通して、その規範を常に評価し、書き換えることでスムーズに調整を行っていく様子を見る。

〈語らいの記述〉

大晦日の新年が近づいた頃、新宿で友人と新年の花火を見ようと思った。

新宿でタイの友人と飲んでいた。1. 過去にタイ、韓国、イギリスで新年になった時の花火の打ち上げを実際に見たことがあったので、日本でも見られると思っていた(筆者の聞き取り)。2. 大きくて有名な新宿なら新年の花火が見られると思っていた(筆者の聞き取り)。花火の見物場所については、3. 深夜12時近くに人がたくさん集まっている所に行けばいい(発話 TF-1)と考えていた。23時ころになって、飲み屋から外に出て、人の集まっている場所を探そうと思ったが、通りには人がまばらにしかないことに気が付いた。その瞬間、4. 花火は新宿ではなくて別の場所で行われるのかと思った(発話 TF-2)。通りがかりの人に花火がどこで見られるか聞いたら、日本では新年の花火はないと言われた。日本人女性が通りかかったので、花火はどこかと尋ねると、わからないと言われた。それでニューイヤーだから花火をするかと尋ね直すと、花火はしない、お寺に行くのだとの答えが返ってきた。これを聞いて、日本では新年を花火を打ち上げて祝うということはせず、その代りお寺に行くのだと5. 了解した。女性が二年参りに行くと知って、友だち共々一緒にお参りに連れて行ってもらった(筆者の聞き取り、発話 TF-3)。

〈インタビューでの実際の発話〉

【発話 TF-1】

80. TF: ぜんぜん いません でも 花火どころは いばい人いるべき
と 思って

【発話 TF-2】

91. Int: で お店を出たときには あまり人が あまりいなかった

92. TF: んん (笑) びっくり

95. Int: そのときどう思いましたか あれっ どう思いました

96. TF: ん たぶん たぶん ちんじゅく じゃない たぶん ほかの
ところ

【発話 TF-3】

133. Int: で その時にですね この この日本では花火はあがる でも
この女の人は これを知らない

135. Int: という風には思いませんでしたか

136. TF: いいえ (笑)

139. Int: ああ そう じゃもう そこで自分の考えをガラッと変えた
んですね

140. TF: はい

150. Int: 花火を見に行きましょう というプランはもうなくなった

151. TF: んん はい お寺に行きました

〈分析〉

TFは経験則から事前に規範を用意していた。規範1.他の外国と同じく日本でも新年は花火があがるだろう(下1)、規範2.新宿ならその可能性が高まるだろう(下2)、規範3.人の集まっているところが花火の見物場所だろう(下3)。発話TF-1の「べき」に規範意識がうかがえる。

しかし、飲み屋の外に出て人があまりいないのに気づいて、「大きい所なら花火がある」(発話TF-2)という規範2.が適用できないと見るや、規範1.と3.を維持して(発話TF-1)、規範2.を捨てて、すぐに通行人に尋ねるといった調整行動をとった。次に日本の新年は花火がなくて、人々は初詣に行くことを女性とのインターアクションで知り、規範1.、3.とも日本の状況に合わせて変更し(発話TF-3)、花火を見る代わりに二年参りに変更

するという調整行動を取った(下5)。ここで特徴的なのは、管理プロセスを円滑に流し続け、事前に用意した規範を常に評価して書き換えて、調整行動を取っていることである。

7.2.2. PUの事例：単独管理・停滞した管理プロセス

ここではPUが冬休み中に地方のN駅からU駅まで在来線で帰る際に経験した列車の番線を間違えたことについて見ていく。

〈語らいの記述〉

冬休みにN市での買い物の帰りに、電光掲示板でU駅に帰る電車の時刻と番線を確認したが、番線を間違えてしまい、2時間近く待つことになった。この半年前の夏に東京でインターンシップの経験があり、複雑な東京の電車・地下鉄を乗りこなせたという自負があり、1. 地方の在来線は簡単だと思っていた(発表での筆者による聞き取り)。また、列車ダイヤと番線は携帯のグーグルの2. 乗り換えアプリで調べてあり(発話PU-1)、予定の番線と並んで電車を待っていたのだが、発車時刻を過ぎても電車が来ない。発車時刻を過ぎた。3. 自分以外にもたくさんの人が並んでいるのを見て、この人たちも遅れた電車の到着を待っているのだと感じて(発話PU-2)、最初の30分は4. 日本でも電車が遅れることがあるのだと思っていた(発話PU-3)。自分が間違えたかなと思い始めたのは、さらに待って自分の番線に到着した電車がN駅に来る時に乗った5. 電車と色が違っていること(発話PU-4)、その電車が6. 入線してきた方向が到着したときと違っていること(発話PU-5)に気が付いてからであり、この間電車の「～行き」の文字情報を確認することはしなかった。その後人が並び始めたので、7. U駅行きか人に尋ねると違うとの答えが返ってきた(発話PU-6)。次いで駅員に尋ねると、1時間後にその番線から出発することがわかり、帰れた。

それで、帽子をかぶっていて、駅員だと見受けられる人にPUが今到着した電車はU駅に行くかと尋ねると、その人は何かの本を開き、行かないと返答。その後一時間して到着したU駅行きの電車に乗って、帰れた。インタビュー時に振り返ってみれば、今回は自分が間違えて隣の番

線で列車を待っていたのだと思う。自国でも道を間違えたことがあるので。

〈インタビューでの実際の発話〉

【発話 PU-1】

158. PU: ふつうは私はいつも携帯電話をつかって ちょうど時間はよく見えます

159. Int: それグーグルですか

160. PU: グーグルです 例えばどこでも行く前 私は たぶん じゃあ

【発話 PU-2】

206. PU: (略) たくさん人が あの いま いますから

208. PU: その人も待っていると 感じしました

【発話 PU-3】

201. Int: で 「最初の30分は日本でも電車が遅れることがあるんだ」と

203. Int: 思ってたんですね

204. PU: はい

【発話 PU-4】

231. Int: (略) ちょっと違うかなと思ったのは人が並び始めてからですか? 時間ですか?

232. PU: えの 電車の色を見て

234. PU: ちょっと違う ち あの 普通 あの あの 長岡に行く電車

236. PU: と違う 違う電車でしたから そう思いました

【発話 PU-5】

242. PU: あと 向こうに 行く電車でした

【発話 PU-6】(注: 口頭発表では尋ねたのが乗客だったが、インタビューでは駅員だった。)

264. PU: (略) 私は もう 30分ぐらいまっていましたから (略) どうしようか 思って (略) 駅員に確認しま (略) その人は 本を あけて

(略) 予定を確認して 私に教えてくれました。駅員は(略) スケジュールの(略) 本を持っていると思います

〈分析〉

PUはN駅からの電車の発車時刻と番線について、東京でも威力を発揮した携帯電話の乗り換え用アプリで調べてあった(下2)。アプリの使用は補償ストラテジーと言える。都内のような複雑な電車・地下鉄網でも乗りこなせた経験から、このアプリに信頼をおいており、地方の単純な在来線は問題にならないだろう(下1)という「電車の利用の仕方に関して自分は正しい」という規範があった。その規範に対する自信は、実際に乗車予定の電車が「来ない」ことへの留意した後、日本でも電車は遅れる(下3,4)と客観的には間違った評価を下す原因になった。この自信はさらに「自分は正しく、間違っているのは列車ダイヤだ」という規範として確立された。それは「日本でも電車は遅れる」という評価が揺らぐことがなく、周囲の乗客も「自分の乗る予定の遅れている」電車を待っていることを、その傍証(下3)としていることから分かる。

「自分は正しく、間違っているのは列車ダイヤ」という規範はさらにしばらく待った後、揺らぎ始めて、PUは文字情報でなく電車の色(下5)や入線方向(下6)というあたかも初めて旅行した場所で使われるような状況証拠に留意し、自分が間違っているのではないかという疑念が起きて、最初の規範が間違いであると評価して、規範を書き換えて、駅員に列車ダイヤを尋ねる(下7)という補償ストラテジーによる調整を行った。思い込みのある規範に対して疑念を抱かせるほどの長い時間経過と信念に対する反証により、規範に対する見直し評価が行われた例と言える。

7.2.3. JJの事例：単独管理・停滞した管理プロセス

JJの場合、口頭発表がインタビューで聴取された実体験を編集し、単純化したものになっており、また体験の詳細な内容に曖昧なところもあるので、筆者による補足を括弧に入れて記述する。

〈語らいの記述〉

春休みに京都旅行した。スマホアプリで金閣へのアクセスを調べて、(地下鉄九条駅近くの) さくらテラスホテルを出た。(筆者注: この時点では銀閣の存在を全く知らなかった。後に金閣と銀閣とがあることが判明する。) 駅(九条駅か)で、駅員に金閣への行き方を尋ねた。駅員が言った銀閣の1.「ぎ」を、「き」の異音だと思っていた(発話 JJ-1)。地下鉄に乗り京都駅まで出て、金閣行きと思っていた(筆者注: 実際は銀閣行き)バスに乗った。英語の標識で Kinkaku-ji に注意しながら行った。向かっている途中で見かけた Ginkaku-ji の2. G は K の誤植だと思っていた(発話 JJ-2)。(筆者注: 実際は銀閣近くの)金閣近くのバス停で降りた。ここまでで、見かけた銀閣の「銀」という漢字を3.「金」の誤植だと思っていた(発話 JJ-3)。金閣への行き方を人に聞いた。金閣近く(筆者注: 実際は銀閣近くの)バス停で降りてから、知らない人に金閣はどこかと写真を見せて質問した。

するとここは銀閣の近くなので、金閣には金閣行きのバスに乗れと言われた。行人は「それは金閣で、そこに本当に行きたいなら、バスと電車に乗るように」との指示を受け、再度駅に戻った。駅員に尋ねると、京都には金閣と銀閣とがあるのだと説明された。4. ここで初めて金閣と銀閣とがあることを知って、認識が変わった。自分がその時金閣でなく、銀閣の近くに来ていることを了解した(発話 JJ-4)。それで、先ず銀閣に行った。バス停から銀閣まではスマホ上のGPS機能と連動している地図を頼りに歩いて辿り着き、観光した。その後、バスで金閣に向かった。

〈インタビューでの実際の発話〉

【発話 JJ-1】

78. JJ: (略) 駅員 (略) は (略) 全然 よく聞こえませんでした (略) 私は「あの すみません 金閣寺に 行きたいんですが」「あ 銀閣寺ですか」

79. Int: So you said 金閣寺 (金閣寺と言ったんですか。筆者訳)

81. Int: so the response from the station man was, you actually heard ぎ?

(駅員は実際に「ぎ」と言っていたのか。筆者訳)

82. JJ: はいはい

84. JJ: Yes, Yes, I heard ぎ (ええ、「ぎ」と聞きました。筆者訳)

85. Int: Upon hearing that he said 銀閣寺、what was on your mind? 何を考えましたか。He was wrong?

(駅員が銀閣寺と言ったのをどう思いましたか。筆者訳)

86. JJ: I like how to say aem a duh ちょっとはたはつ like a mispronunciation like when when some people say for example ちゅうごくご some people say ちゅんのくご

(「ちゅうごくご」を「ちゅんのくご」(「の」は鼻濁音の「ご」という人もるように発音の間違いだと思っていた。筆者訳)

【発話 JJ-2】

66. JJ: Yeah But ah ah huh すみません あの What happened at that time, I looked at word 金閣寺 in English. I I looked. I I I thought that it's kind of, like a, mis-typing like 銀閣寺

(実は、金の文字を探してたから、銀は誤植みたいなものだと思った。筆者訳)

67. Int: thought it's typo (誤植だと思っていた。筆者訳)

68. JJ: Yes something like that. Like, like when my friend send me a link or something, they will send for example いけふくろ instead of いけぶくろ

(そんな感じ。友人がネットのリンクを教えてくれる時に、「いけぶくろ」じゃなくて、「いけ」と「ふくろ」と発音してくれるように。筆者訳)

【発話 JJ-3】

166. JJ: ,,I memorize 金 as the 金曜日 for me as the kanji of 金曜日 and after that when I looked at like that I thought that 銀閣寺 is like mistyped or just because of, like a kind of mis-pronunciation or something.

(金閣の頭の漢字を金曜日の金と記憶しておいた。それで銀閣の銀の漢字は金の誤植や発音の間違いに由来するものだと思っていた。筆者

訳)

【発話 JJ-4】

142. JJ: Since that time I, I had a perception I, the perception started to change that aa 金閣寺 and I have already known about the existence of 銀閣寺.

(銀閣寺があると知ったその時から、金閣寺しかなかった認識が変わった。筆者訳)

〈分析〉

JJは金閣に行こうとして、果たして銀閣近くに辿りついてしまった。その後説明してもらい、金銀両閣への行き方を理解した上、最終的には納得して銀閣に向かったのだが、その直前まで銀閣の存在を知らず、京都には金閣しか存在しないという無知の状態であった(下4)。それ故、金閣に向かっているのは間違いないとの評価が生まれ、これが標識の文字や駅員の言葉などごとごとく金閣の間違いとみなす色眼鏡として働いた。この色眼鏡の規範がその後の管理プロセスの流れを停滞させた結果、銀閣に向かっている事実(下1.~3.)は留意されたものの、誤植や異音と評価されてしまい、本来なら行われるはずの調整が行われなかった。色眼鏡の解除は、駅からの道順を尋ねたとき、教えてもらった情報の「京都には金銀両閣がある」という全体像を本人が知った時だった。以降はそれまでの規範は間違いと評価され、規範も書き換えられ(下4)管理プロセスが流れ始めた。誤った評価に基づく規範が管理プロセスの流れをブロックした例である。

7.3. 共同管理の事例

ここでは2組のペアが、車両の分離とそれを予告する車内連絡が日本語でのみなされた、という同一条件の下、異なる管理プロセスにより対照的な結果を招いた事例を扱う。2組とも中級の学生一名とその友人の上級の学生一名で構成されるペア(以後ペアX、ペアY)で、2ペアともU駅のあるN県に帰るべく大阪で乗った列車が京都駅で前4両と後ろ4両が分離して路線¹²⁾が分かれ、N県に帰るには前4両に乗る必要があった点、本人

の報告ではこの車両分離の情報は携帯電話の乗り換え情報のアプリで知ることができなく、また京都駅に到着する直前に日本語の音声の車内連絡があるだけだったという点が同じである。

4か月の時間差で同じ条件の列車に乗ったペア X と Y の違いは、ペア Y は N 県行きではない方の車両に乗ったまま終点に行ってしまう、そこで初めて間違った車両に乗っていたことに気づき、電車に乗り直して N 県に帰って来られたのだが、ペア X は車内アナウンスの際に管理プロセスを発動し、規範を評価し直し、補償ストラテジーも使い、前 4 両に乗り移って、無事 N 県に帰って来られたという点である。

7.3.1. ペア X (IF と友人 CY) の事例：共同管理・円滑な管理プロセス

ペア X は京都駅到着直前に流れた車両分離についての車内アナウンスがあつてから迅速に管理プロセスを発動し、上手に調整行動を行った。その要因を探してみる。

〈語らいの記述〉

発表で報告した問題に遭遇する前にも U 駅から大阪に在来線で行ったことがあり、無事に行けた。別の機会だが、東京からの帰りに越後湯沢駅で列車が分離して、前 8 両は新潟駅まで行き、後 8 両は越後湯沢駅止まりという新幹線に乗っていた。1. その時本人は後 8 両に乗っていて、車掌に促されて前 8 両に移ったという経験をした (筆者の聞き取り)。

春休み大阪から U 駅へ北陸線経由で帰るところだった。ネットで調べたが、乗り換え情報に車両が分離する情報は載っていなかった。

問題が起きたのは日本語超級の中国人の女子学生の友人と二人で大阪から新潟に北陸線経由で U 駅に帰ってくる時のこと。京都でアナウンスがあったが、分からなかったので、周りの人にこれは米原に行くかと聞いたところ、前の車両は米原へ、後の車両は敦賀に行くということが分かった。2. 京都駅で何か車内アナウンスがあつて人が動き始めたのをみて、周りの人に聞く (発話 IF-1) と、説明をしてくれた。3. それを友人がよく理解してくれた (発話 IF-2)。 後の車両にいたので、前の車両に

走って移り、N県に帰って来られた。自国ではよくあることだが、日本でもそのようなことがあるのかと思った。

〈インタビューでの実際の発話〉

【IF-1】

61. Int: その時 どのタイミングで どうして あ 聞きましょうと思
いましたか

62. IF: あ 他の人は あむ 降りる 人も いましたが あの 他の
車両に 行く人も いました だから いちおう 聞きました

【IF-2】

78. IF: 実はCYさんと いしょに聞きましたから CYさんが もっと
分かります

82. IF: そうです CYさんがいなかったら たぶん 迷いました

〈分析〉

IFの場合、本件以前にU駅から大阪まで無事に行けたことがあったが、だからといって同様の本件遭遇時にも問題があるはずがないとは思っていなかった。それは別の機会に車両分離を(下1)経験していたことが「(今回も)問題があるはずがない」という規範を評価し直す態勢ができていたためと考えられる。このため車内アナウンス(注: IFがアナウンスをどれだけ聴解できていたかはインタビューで確認できず)や周囲の乗客の動きに対する率直な留意に(下2)始まり、CYによる乗客への確認(下3)、車両分離の理解、車両を移るという調整行動までの一連の管理プロセスが滞らずに流れたと考えられる。

7.3.2. ペアY(KMと友人MH)の事例: 共同管理・停滞した管理プロセス

KMの経験は口頭発表ではなく原稿なので、文体を修正して引用し、インタビューで明らかになった事を併せて記す。ペアXと異なりペアでの管理プロセスが滞った例である。

〈語らいの記述〉

冬休に関西旅行をして、京都、奈良、大阪など関西の町を三つ訪ねた。お金も残り少なかったので、青春18切符で普通電車の旅行をした。疲れていたから普通電車は大変だと思っていた。大阪からU駅まで普通電車で戻ったが乗り換えが五つもあった。

MHは同じ大学の上級コース1を履修中で日本の在住経験もあった。電車のスケジュールを携帯電話のアプリで確かめて、大阪から出発した。自分は「乗り換え案内」、MHは“yandex yahoo train”というアプリでそれぞれ乗り換えを事前に確認しておいた。

1. 京都へ来たとき、アナウンサーは何か言ったが電車の中でうさくで、アナウンサーが早口だったから、何も分からなかった。アナウンサーは車両の番号と、さらに何かを言ったが分からなかった（筆者による聞き取り）。この時、自分らの車両番号も知らなかった。

MHはこの時、実は2. 携帯電話でメッセージのやりとりをしていて、アナウンスを聞いていなかったのにも関わらず、アナウンスのことは心配しなくていい、大丈夫だと言った（発話 KM-1）。これを聞いて、自分は心配だったが、3. 友人が2年も日本に住んでいるのだからと思い直し、友人のことは一旦信じた（発話 KM-2）が、念のため再度自分でアプリで京都では乗り換えがないことを確認した後、安心して寝てしまった。

4. 目が覚めるとアプリで事前にチェックした乗り換え予定の駅と違う駅⁽³⁾ だった。駅名は全く覚えていない。自分は気分を害していて、友人が駅員に聞きにいこうと言い出し、結局運転手に聞きに行き、5. MHが質問して1から4号車がN県行きということを確認した。ルートをチェックして、京都にもどることなく、電車に乗り直してN県に帰ってこられた。

それ以来車内アナウンスに注意するようになった。今は今回の経験のある種のアドベンチャーようなものだったと思っている。

〈インタビューでの実際の発話〉

【発話 KM-1】

94. KM: はい 友だちは(略)ききたい(携帯)電話で(略)メッセージを

して何も聞こえなかった その時 そのアナウンサー

98. KM: 聞きませんでした

99. Int: 友だち聞いていなかった?

100. KM: はいはい(笑)でも 私には心配しないでください と言いました

【発話 KM-2】

103. Int: ジャ 友だちが そのメキシコの友だちが 携帯電話出でて KMさんが質問しましたね で大丈夫だ と言った時にどう思いましたか

104. KM: はい (略) 友だちは 日本に2年ぐらい いい 住んでいます

106. KM: んん そう 安心しました

〈分析〉

ペアYは車両切り離しのことがアプリで知り得なかったため、自らを取り巻く状況が把握できないまま、自分たちは正しいという規範を持ち続けた。車両分離の唯一の手がかりである車内アナウンスにKMだけは留意(下1)したが、日本語の聴解能力の低さと車内の騒音に加え、日本語の接触場面の権威たる友人の誤ったアドバイス(下2)が重なり、この規範を見直す管理プロセスがブロックされた。ただKMは結果として規範の見直しの管理プロセスを発動しないことを選択したのだが、アナウンスに留意して、調整を行わないでいいのかという心配と友人の権威とアプリへの信頼感からの大丈夫だという相反する気持ちの間を、あるいは規範の見直しの管理プロセスを始めるか否かの分岐点で揺れ動いていた(下2、3)のが分かる。管理プロセスのブロックが解除されたのは、終点で異変(下4)に留意して、規範の評価の見直しと書き換えが行われた時であった。ここから管理プロセスが流れ始め、調整行動(下5)につながっていった。

7.4. 管理プロセスの停滞について

上記の管理プロセスの停滞が起きた事例の共通点を以下に模式化する。

- (1) 事前管理として補償ストラテジー（列車の乗り換えアプリ）で情報を確認し、実質行動に関する規範が形成され、その規範には信頼がおかれ、肯定的に評価される。
- (2) 状況の全体像が形成され、それが客観的には不全であるにも関わらず、完全な全体像と認識されている。
- (3) 自分の把握している状況が完全であり、自分が正しいという信念に裏打ちされて規範に対する評価が行われなくなる。
- (4) 客観的に正しく、本人が間違っていることを示す情報は、肝腎なところがマジョリティ言語であるため、留意されても(3)の規範に合うように合理化されてしまう。
- (5) 管理プロセスの流れが(3)の規範によりブロックされて(2)から(4)を空回り、あるいは停滞する。
- (6) 間違った方向に事態が相当に進み、否応なく本人に留意と評価を迫る。ここに至って初めて規範を評価し直し書き換えるという管理プロセスが始動し、補償ストラテジーである母語話者の協力を仰ぐという調整行動に至る。

8. 考察

8.1. エティックなこととイーミックなこと

花火見物 (TF) と鉄道利用 (PU、ペア X と Y) を比較し、実質行動とそれに関する規範を考えてみると、花火見物の場合はほぼ万国共通でエティックな面が大きく、イーミックな面が小さいのに対し、鉄道制度は国や地域によって相当に異なっており、エティックな面が小さく、イーミックな面が大きいと言えよう。

TF が花火見物のために準備していた規範は日本での花火見物の規範とある程度エティックな点で共通していたが、新年の花火、打ち上げ場所などイーミックな相違点があった。したがってエティックな実質行動に対する元来の規範は評価を経て、書き換えられ、調整されねばならなかった。

一方、鉄道制度は利用者の立場に限っただけでも、座席の種類、料金体

系、列車の運行、路線、用語などが極めて複雑に絡み合いながら、地域的な違いもあるという極めてイーミックなものである。そのため、一般的な規範や知識に加え、地域が異なる度に管理プロセスを働かせて調整が必要となる。PUやペアYらもこの点に表面的な留意をして、事前の管理プロセスはある程度働かせていたのだが、一度問題が起きてから事前に用意された規範を評価して書き換え、調整行動に移るまでの管理プロセスが流れ出すまでに時間がかかった。イーミックな制度の環境では常に管理プロセスを働かせて、常に規範の評価が行われる必要があると言える。

8.2. 外の世界のイーミックな問題

イーミックな問題の解決をするためのヒントを考えると、円滑に管理プロセスを回して調整したFT並びにペアXと、プロセスにブロックがかかって紆余曲折を経ながら調整にこぎつけたPU、JJ、ペアYが対比される。前者は自らの規範を評価して書き換える準備ができており、他者とのインターアクションをためらわず行っている点が特徴である。一方後者はその反対で、規範に対する評価の準備ができていないことが原因となって、問題解決につながる他者とのインターアクションが遅れた。

したがってマジョリティ・ホスト言語のコースへの示唆として以下のことが考えられる。

- (1) 移住者が所属する言語共同体の外で関わりを持つ具体的なことへの意識を高める。あたかも学習者が問題が起きた場に身を置いているかのような現実味のある質問をする、過去の事例を紹介するなど。
- (2) 補償ストラテジーの種類を増やす。様々なアプリの使用、事前の情報収集、質問ができるという技能、他者へ質問ができることなど。
- (3) ある人の持つ規範は評価を経て淘汰されて生き残ったもので、それだけに再評価を受けること自体とその結果としての書き換えが行われにくいのだろう。しかしながら、様々な難局を切り抜けた参加者はみな評価を率直に受け入れて、規範を書き換えてきた。したがって、学習者が言語管理プロセスにおいては柔軟な姿勢で評価を厭わずに行い、プロセスを停滞させないように工夫に留意させたい。問

題解決の鍵は古い規範を評価して新しい規範に書き換えようとする心的態度であったことを考えると、学習者が自尊心を保ちながら、自己の持つ規範については自信過剰に陥らず、評価、再評価ができればいいだろう。学習者を主人公に仕立てて過去の事例をナラティブにして、解決を考えさせてみるのもいいかもしれない。

9. まとめ

グローバル化が進む言語共同体では多くの規範がエティックなものへと変容していくが、その際、ホスト言語環境に対して境界を作り、自らを隔てることになる。そのような共同体の内ではホスト言語使用者はエティックな公用語の習熟が課題となり、移住者には外部のイーミックな環境への適応が問題となる。現在国内ではマジョリティ・ホスト側の直接の関心事ということで、前者が注目されがちだが、移住者にとっては後者の問題の方が問題で、看過されてはいけない。非マジョリティ・ホスト言語を公用語に定めた環境が人為的な規範に基づいているなら、その責任上規範の策定者にはどちらの問題にも十分な対応が望まれるが、特に移住者の抱える問題に対する対策を常に管理プロセスを働かせて評価し、調整することが必要である。

またマジョリティ・ホスト側はイーミックな部分を移住者に分かりやすくすることが望ましい。ペア X、Y の事例で見たように、公共交通機関がノイズ情報(岩田、2014)の多言語化を進める一方、車両の増解結のような重要な情報を日本語の音声アナウンスでしかしないのは優先順位が逆転していると言わざるを得ない。せっかく移住者のための多言語化なら、制度の管理者は移住者の立場で情報を評価、峻別し、優先順位を付けた上で、ノイズは減らして、真の情報を分かりやすく伝える工夫が欲しいところである。

グローバル化による移住者の増加はホスト社会と移住者双方にとって様々な問題を必然的に作り出す。それらの問題に対してあらゆる立場から常に評価を行い、規範を書き換え、調整行動がとれるように管理プロセスを停滞させないことが解決の一つの鍵なのであろう。

注

- 1) President Online (2015) は社内英語公用語化した企業の例として、楽天、日産、ファーストリテイリング、武田薬品工業、本田技研などを挙げている。
- 2) 三木谷 (2013) で楽天 (株) を英語公用語にした代表取締役会長兼社長の三木谷浩史は「グローバル企業はみな英語を話す」ことと「海外からの人材獲得」をその理由に挙げ、これらは「グローバル化のための先行投資」だとまとめている。
- 3) 文部科学省 (2009b) では英語による授業のみで終了できる国、公、私立の研究科: 大学数 57、研究科数 101 とあり、例として国際教養大学 (国際教養学部)、東京基督教大学 (神学部)、上智大学 (国際教養学部)などを挙げている。
- 4) 日本学術振興協会のスーパーグローバル大学創成支援は「大学改革と国際化を断行し、国際通用性、ひいては国際競争力の強化に取り組む大学の教育環境の整備支援を目的と」するとあり、平成 26 年度同事業審査基準には (4) 語学力関係 1. 外国語による授業科目数・割合、2. 外国語のみで卒業できるコースの数等、3. 日本語教育の充実、4. 学生の語学レベルの測定・把握、向上のための取組、が挙げられている (日本学術振興会、2010)。
- 5) Jack, Platt, and Platt. (1992) は speech community: a group of people who form a community, e.g. a village, a region, a nation, and who have at least one SPEECH VARIETY in common. と定義している。
- 6) 原文は "Any human aggregate characterized by regular and frequent interaction by means of a shared body of verbal signs and set off from similar aggregates by significant differences in language usage"
- 7) I 大学は「講義は原則として国際用語である英語で行う」という設立趣旨を核に教務、事務など全制度を英語だけで事足りるように整備発展させてきており、ほぼ完全英語公用語制度といえる。学生は全員等しく英語公用語の方針の影響を受ける。アカデミック英語の能力は入学の必要条件である。日本語能力は入学の条件として問われることはなく、日本語コースも必修科目である。
- 8) 全学生 385 名 中学外在住者は 50 名 (2015 年 10 月時点)
- 9) 日本語を母語とする学生は 51 名 (2015 年 10 月時点)
- 10) 国連人口部は United Nations 1998 中で長期移住者 (long term migrants) を「出生あるいは市民権のある国の外に最低 12 カ月以上滞在している者」、短期移住者を「出生あるいは市民権のある国の外に最低 3 カ月以上 12 カ月未満滞在している者」と定義している。
- 11) Setting: Setting refers to the time and place of a speech act and, in general, to the physical circumstances. Scene: "psychological setting" or "cultural definition" of a setting
- 12) ペア X と Y からの報告に符合する列車を探るべく京都駅の案内所に筆者が尋

外国人住民の評価の語らいから見るインターアクション問題

ねて判明したことを以下に記す。まず、大阪からの8両編成の新快速で、京都駅から下る湖西線の途中の近江今津駅で前後の4両が切り離(解結)され、後4両は当駅止まり、前4両は敦賀に向かうものがあり、近江今津駅での解結については京都駅で日本語のみの車内アナウンスで予告されるとのことで、これはペアYの報告とよく符合し、ペアYはこの新快速に乗っていた可能性が高い。次に、別の新快速で京都駅で解結して、後8両は京都駅止まりで、前4両が敦賀に向かうものがあり、京都駅での解結のアナウンスはこれも京都駅で日本語だけでなされるとのことだった。ペアXはこれに乗っていた可能性も否定できない。

13) 10) で既出の近江今津駅だと思われる。

参考文献

- 岩田一成(2014)「言語景観・言語サービスの課題」『日本言語政策学会第16回大会予稿集』75頁
- 加藤好崇・阿曾村陽子・鹿島彰・芝薫(2002)「東海大学学部留学生日本語使用実態調査プロジェクト」『平成14年度第12回日本語教育学会仙台研究会発表予稿資料』1-4頁
- 澤恩嬉・後藤典子・渡辺文生・山上龍子(2008)「初級日本語学習者の教室外活動を支援するための教室内指導: 電話による問い合わせ・依頼の場面を中心に」『日本語教育方法研究会誌』15巻、2号、2-3頁
- 澤恩嬉(2011)「接触場面におけるカタログ請求の電話の縦断的研究」村岡英裕編『接触場面・参加者・相互行為: 接触場面の言語管理研究 vol. 9』千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書238集、27-40頁
- 竹内明弘(2011)「初級学生が遭遇した接触場面の問題を授業に生かす実践活動」『IUJ working papers』第19号 <http://www.iuj.ac.jp/language/pdf/research/LP-19-1.pdf>
- 日本学術振興会(2010)「スーパーグローバル大学創成支援」<http://www.jps.go.jp/j-sgu/>(2015年12月5日確認)
- ネウストブニー、J. V. (1995)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7号、大阪大学文学部日本学科、67-82頁
- ネウストブニー、J. V. (1994)「日本研究の方法論: データ収集の段階」『待兼山論叢』28号、大阪大学文学部、1-24頁
- President Online(2015)『『英語公用語化』は突然降ってきた——ドメスティック社員たちの慟哭』『「仕事人×生活人」のための問題解決塾」プレジデント社 <http://president.jp/articles/-/16036>(2015年12月5日確認)
- 三木谷浩史(2013)「楽天が英語を公用語にした本当の理由」『文芸春秋オピニオン2013年の日本の論点』文芸春秋、228-229頁

- 文部科学省(2009a)「国際化拠点整備事業」<http://www.uni.international.mext.go.jp/ja-JP/>(2016年8月23日確認)
- 文部科学省(2009b)「大学・短大・専門教育に関すること: Q1 グラフ」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/001/001.htm(2016年8月23日確認)
- Gumperz, J. (1964) Linguistic and social interaction in two communities. In Blount, Benjamin. (ed.) *Language, Culture and Society*. 14, pp. 283–299
- Hymes, D. H. (1972) On communicative competence. In J. B. Pride & J. Holmes (eds.), *Sociolinguistics* (pp. 269–293). London: Penguin.
- Hymes, D. H. (1974) *Foundations in sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Jernudd, B. H. and Neustupný, J. V. (1987) Language planning: For Whom? In Laforge, L. (ed.) *Proceedings of the International colloquium on Language Planning*. May 25–29, 1986, Ottawa. Les Presses de l'Université Laval, pp. 69–84.
- Jack. C. R., J. Platt, & H. Platt. (1992) *Longman dictionary of language teaching and applied linguistics*, Second Edition, Longman Group UK Limited.
- Neustupný, J. V. (1996) Japanese discourse studies: Native and contact situations. *Handai Nihongo Kenkyu*, 8. Department of Japanese Linguistics Faculty of Letters, Osaka University, pp. 1–13.
- United Nations (1998) *Recommendations on Statistics of International Migration. Revision 1* (p. 10). New York: Department of Economic and Social Affairs Statistics Division.